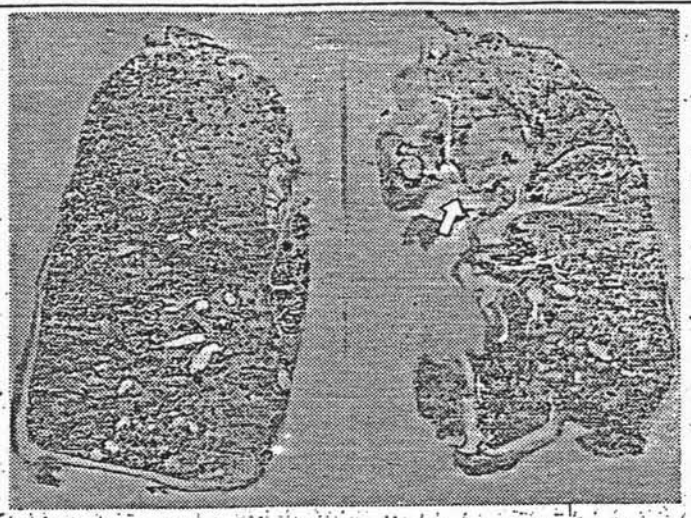
197

石綿作業で肺がん

国立療養所病院長確認　日本にも6人の死

絶縁材や断熱材として、電気器具や建築用に広く使われている石綿（アスベスト）の製造工場で、従業員らに肺がんが多発していることを、堺市長曽根町、国立療養所近畿中央病院の瀬良好澄院長（五六）が突止めた。同院長の研究によると、大阪府泉佐野、泉南両市の石綿紡績、石綿紡織工場で最近十一年間に八人の肺がん患者が出ており、うち六人が死亡した。加工中などに飛散った石綿粉塵（ふんじん）の発がん性や、これによる大気汚染の危険は、海外で早くから指摘されていたが、わが国で石綿によるとみられる肺がん患者の発生が明らかにされたのは、これが初めてである。



石綿工場で三十五年間働いた工員の肺、左肺（向って右）の矢印のところがガン。右肺（同左）も石綿じん肺にかかっている

同院長の研究によると、八人の肺がん患者は男六人、女二人。八人とも大阪府泉南市の石綿紡績、石綿紡織工場に、長い人で三十五年、短い人で三年間働いていた。死亡した六人（いずれも男）は、まず石綿じん肺にかかり、それから二―十年後に肺がんをひき起し、半年―一年後に死んでいる。生存中の二人の女性患者も石綿じん肺にかかって一年後に肺がんの疑いがあると診断された。

八人のうち五人は石綿工場で、もっとも粉塵の多い石綿と綿をまぜる混、梳綿（そめん）工の工程で働いた人たち。他の二人は糸から布をつくる粗紡工、もう一人はロープ工だった。

このほか肺がんの前駆症状となったじん肺について、瀬良院長は石綿製造工場の従業員以外の発病もつきとめている。大阪市の吹付け工（死亡当時五十九歳）は四十八歳から七年間、石綿吹付け作業に従事、昭和三十九年五月に強い息切れを訴えて石綿じん肺と診断された。四十二年入院、四十四年十月死亡。石綿製造工場外で発病した日本での珍しい例で、最近、ビルの断熱材などに石綿布が使われているが、石綿を壁にジカにふきつける工法が取入れられているので患者はほかにもあるのではないかと瀬良院長はみている。

また夫が石綿工場で働いていたため、工場敷地内の社宅に十年間住んでいた泉佐野市の女性（七三）は、今月十三日検診したところ、石綿じん肺にかかっていた。

瀬良院長は「石綿じん肺の進行は非常に早く、たとえ軽症だと思っても死ぬことがある。しかも、石綿じん肺は、石綿工場で働く人以外からも出ていることがわかってきた。石綿とがんとのメカニズムはよくわからないが、石綿じん肺が組織的にがんの発生母地であることはいえる」といっている。

石綿が肺がんを引起す疑いについては、ことし五月、アメリカで開かれた国際がん会議で、アメリカの学者が石綿工場従業員の死亡率は一般市民にくらべ約一・五倍で、死者三人に一人が肺がんだったと報告した。

宝来善次奈良県立医・石綿が肺・大教授（内科）の話　がんを起すことは、日本では予想されていなかったため、あまり研究されていなかった。私も奈良県で調べているが、まだみつかっていない。それが八人も出たということはたいへんなことだ。アメリカではブレーキのライニングに使われている石綿が、ブレーキを踏むとき石綿粉塵を出し、がんのもとになると問題になっている。発がん物質の発生源をおさえることが最大の肺がん防止対策だが、日本でもこれから各方面の人たちが真剣に取組むべき新しい問題だ。

石綿（アスベスト）とは

橄欖（かんらん）石や輝石などが地熱で解けて岩漿（しょう）となって地中に凝結するとき、地下水や炭酸ガスなどで変化し、繊維状に結晶した鉱石。カナダ、ソ連、南ア連邦などが世界の主産地。用途は、長い繊維をもつもので含水量の多いものはそのままか、あるいは綿を少しまぜて糸をつくり、織物にして消防服や製鉄所の炉で使う耐熱服、化学用の炉布などに使う。また、短い繊維の石綿はそのままセメントとまぜてビルの断熱用に使ったり、石綿高圧管、石綿スレートにするほか、壁や天井にふきつけて吸音率を高めるのに使われる。